May 30, 2011

【**組織的な若手研究者海外派遣事業の帰国報告書**】

研究施設: Universite du Bordeaux Ⅱ, Hopital Haut Laveque,

 5, avenue de magellan 33604 bordeaux-pessac,France

 University of Toronto, The hospital for sick children

555 University Avenue, Toronto, Ontario, CANADA

所属部署: 心臓血管外科

職名: Associated trainee at Universite du Bordeaux,

 Surgical observer at University of Toronto,

目的: 筑波大学とボルドー大学の継続的国際研究交流提携の検討

 心臓血管外科領域先端治療技術の研究

 重症心疾患児の治療における集学的マネジメントの研究

期間: 2010年12月16日～2011年1月31日Universite du Bordeaux

 2011年2月1日～2011年2月19日University of Toronto

[研究概要]

1、ボルドー第二大学Hopital Haut-Levequeは年間1000例以上の心臓血管手術を行うフランスでも有数の循環器病センターである。フランスは心臓血管外科学の分野でも先端技術開発を積極的に行っており、過去にも数々の革新的な技術を開発供給し今日の心臓血管外科の礎を築いた国である。ボルドー大学と医療技術交流を行い最先端の医療技術を導入することは、筑波大学が日本における高度先進医療を提供する場としてのより一層の発展を促すものと考えている。また、筑波大学で研究する若手研究者の教育目標の一つにグローバルな視野をもつ国際的医療人の育成があげられるが、ボルドー大学との研究交流はまさにその一端を担うプロジェクトであるといえる。今後の継続的な研究交流の基礎づくりのため、ボルドー大学Vice-President External RelationsであるVincent Dousset教授およびinternational officeのFrederic Bertland氏との現地ミーティングを行い、今後の継続的交流についての詳細を検討した。

日本とフランスにおける医学システムの違いにより、医学生および若手医師の海外研修にたいするモチベーションが高まる時期や、その至適タイミングなどが両国において相違することが解り、両国における各世代のニーズに合わせたより細かい交流計画が必要であることで合意した。引き続き筑波大学からは若手研究者を派遣し、ボルドーからはまず医学生を中心に筑波大学への留学を検討する方針となった。また、ボルドーにおける宿泊施設状況や交通網などの実地調査も行った。

2、前述のようにボルドー第二大学Hopital Haut-Levequeはフランスでも有数の循環器病センターである。日本ではまだ経験の少ない経皮的大動脈弁置換術を多数行っており、また日本ではいまだ導入されていない新型のステントレス生体弁であるfreedom solo valveを用いた大動脈弁置換術を積極的に施行していた。日本では高齢化社会にともない、合併症を多く抱えた高齢者に対する手術の安全性が問題となっている。このためより低侵襲かつ効果的な手術治療法の開発が望まれている。このような中、経皮的大動脈弁置換術は大動脈弁をカテーテルで置換する技術であり、従来の手術と比しより低侵襲であるとされ、本邦でも現在治験中である。しかしながら、限定された施設での治験であるため通常であれば経験することが難しい手技であるが、今回ボルドー大学では数例の症例を経験することができた。また、ステントレス生体弁はその形態と植え込み方法が従来の機械弁と異なり短時間で植え込みができるため、より低侵襲な手技と考えられており今後世界で注目される手術手技となるであろう。フランスは実は世界に先駆けて高齢化社会に突入した国であり、平均余命も女性は世界第3位である。手術手技のみでなく、高齢化社会における医療のあるべき姿と治療のストラテジーについても今回多くを学ぶ機会を得ることができた。

3、トロント大学では、世界でも最も高名かつ歴史のあるトロント小児病院で研究を行った。カナダ、トロント近隣州や北米のみならず世界から心臓の治療のために小児が集まる世界最先端の技術を誇る病院である。ここでも数々の先端技術を学ぶことができた。日本では症例数の少ないホモグラフトを使用したRoss手術やNovolungという埋め込み型人工肺などを経験することができた。また、複雑心疾患児の術前、術中、術後の集学的マネジメントが多くのドクター、パラメディカルによって非常に系統的かつ合理的に行われていた。おのおのの提供する医療のレベルが非常に高いのみならず、それを最大限有効に使うシステムが出来上がっていた。近年日本でも医師不足による医療過疎化が懸念されているが、よりよい医療の提供のためには医師やパラメディカル個人の努力だけではなく、その運用システムの構築も重要であることを実感した。

最後に：今回組織的な若手研究者海外派遣事業に参加し、非常に多くのことを学ぶことができた。海外の医療現場で研究することにより心臓血管外科領域の先端技術を学ぶのみならず、医療システムの構築において社会的背景の違いがおよぼす影響など、日本国内にいるときとは違う観点で本邦の医療をとらえる良い機会となった。若手と呼ばれるうちに海外で研究することは、グローバルな視野をもつ国際的医療人の育成にはきわめて大きな意味を持つことであると考える。この機会に恵まれたことに感謝するとともに、今後も海外で学び筑波大に帰ってくる人を一人でも多く支えていただきたいと考える。

ボルドー大学心臓血管外科教授　Prof.Rouqueと

